

ヨルダン南部ジャフル盆地の遊牧化

—タラアト・ウバイダ台地における銅石器～前期青銅器時代フリント採掘坑群の分布調査(2022)—

藤井 純夫 金沢大学古代文明・文化資源学研究センター特任教授
 上杉 彰紀 金沢大学古代文明・文化資源学研究センター特任准教授
 久米 正吾 金沢大学古代文明・文化資源学研究センター特任助教
 安倍 雅史 東京文化財研究所文化遺産国際協力センター主任研究員

Pastoral Nomadization in the Jafr Basin, Southern Jordan: Survey of Post-Neolithic Flint Quarry Sites on the Tal'at 'Ubayda Tableland

FUJII, Sumio Specially Appointed Professor, Center for the Study of Ancient Civilizations and Cultural Resources, Kanazawa University
 UESUGI, Akinori Project Associate Professor, Center for the Study of Ancient Civilizations and Cultural Resources, Kanazawa University
 KUME, Shogo Project Assistant Professor, Center for the Study of Ancient Civilizations and Cultural Resources, Kanazawa University
 ABE, Masashi Chief Researcher, Tokyo National Research Institute for Cultural Properties

1. はじめに

ヨルダン南部、ジャフル盆地における先史遊牧民遺跡の総合調査は、コロナ禍による3年間の中断を挟んで、本年夏に再開した。コロナ禍直前まで調査していたのは、同盆地北西部に位置する銅石器時代後半の半農半牧集落、ハラアト・ジュハイラ2号遺跡(Harrat Juhayra 2)である(藤井・足立2019、藤井他2020、Fujii 2022; Fujii *et al.* in print)。この集落では、家畜2次産品の利用拡大を示唆する羊毛刈り用の石器(タビュラー・スクレイパー、tabular scraper)が多数出土した。この石器の生産と流通は、往時のヒツジ遊牧民の動向をトレースする格好の手がかりとなる。そのため、再開後の調査では上記集落に隣接するタラアト・ウバイダ台地(Tal'at 'Ubayda)に移動して、フリント石材の調達問題に取り組んだ。以下は、その概要である。

2. 分布調査の方法

フリント採掘坑群の分布調査は、8月25日から9月25日までの1ヶ月間、実施した。調査対象となったタラアト・ウバイダはジャフル盆地の北西隅に位置し、上面が平坦で側面が懸崖を成す典型的なテーブル状台地である。この台地では厚い石灰岩層と薄いフリント層が互層を成しており、後者に含まれる第三紀始

新世の良質なフリントがタビュラー・スクレイパーの素材として盛んに利用された。今回は、台地北端の約30 km²を踏査した。

踏査は、2回に分けて行った(図1)。第1次のサーベイでは計19件の遺跡を登録し、緯度・経度・面積・フリント採取法などの基本情報を記録した。その結果、12件が露天式の採掘、6件が露頭での表採、残り1件が両者の折衷形態と分類された。第2次調査はこのうちの11件を対象に実施し、ドローンによる地形測量、設定トレンチ内での石核データの収集などを行った。以下、採掘型を中心に、代表的な事例を紹介する。

3. 2202号遺跡(線状採掘)

台地東端中央に位置する小型のフリント採掘遺跡(図2)。写真中央に延びる白い帯が、線状のフリント採掘坑跡(全長約80 m×幅約5 m)である。その左右両岸には、採掘坑からの排土と採掘されたフリント原石が置かれていた。後者の中にはタビュラー・スクレイパーの石核も多数含まれており、例えばトレンチ2北端のグリッド(Square 2 A、5 m×5 m)では計129点の石核が確認された。こうした原石・石核は、しばしば直径1~2 m前後の環状集石を形成しており、中央の空白部に座って作業したことを示唆している。なお、採掘坑と並行して伸びる左右一対の白い線は石灰

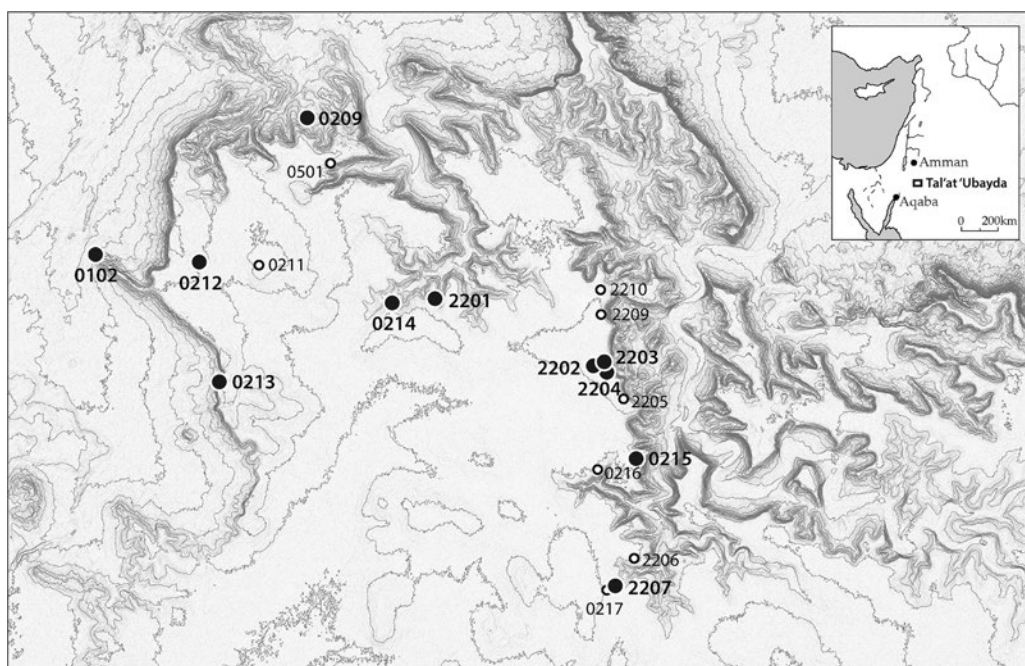


図1 タラアト・ウバイダ台地のフリント採取遺跡群：第1次調査(○)、第2次調査(●)

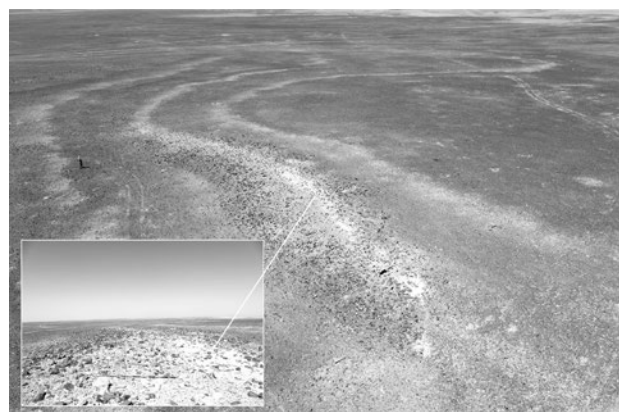


図2 タラアト・ウバイダ 2202 号遺跡全景(南東から)



図3 タラアト・ウバイダ 0215 号遺跡全景(北から)

岩浮石の帯状分布帯である。フリントの採掘はこれを目安に始まり、これと並行して進められたと考えられる。2202号遺跡と類似の線状採掘坑は、0212号遺跡(全長約550 m)、2205号遺跡(全長約200 m)、2210号遺跡(全長約350 m)でも、確認された。

4. 0215号遺跡(線状+平面的採掘)

前述した2202号遺跡の南約1.5 kmに位置する、全長約150 mの小型採掘遺跡。大部分は線状の採掘であるが、その北端に平面的な採掘の痕跡が認められた(図3)。(ちなみに純粋に平面的な採掘坑はまだ確認されていない。これは、排土の負担が大きいためであろう。)この場合も、採掘坑の左右にはそこから運び出された排土やフリントの原石・石核が集中していた。

同タイプの採掘坑は、0211号遺跡(全長約350 m)、2201号遺跡(全長約40 m)、2206号遺跡(全長約130 m)でも確認された。いずれの場合も、平面的な採掘は線状採掘の端の部分に集中していた。この事実は、平面的な採掘が線状採掘に入る前の試掘(または線状採掘終了間際のランダムな採掘)であったことを示唆している。

5. 2207号遺跡(ランダム採掘)

台地南東隅に位置する小型の採掘遺跡。100 m×25 mほどの面積に、円形～楕円形の採掘跡10数件がランダムに分布していた(図4)。個々の採掘坑は、直径(または長径)5 m前後の大きさであった。このタイプの採掘は、本例以外にはまだ確認されていない。



図4 タラアト・ウバイダ 2207 号遺跡全景(南東から)



図6 タラアト・ウバイダ 0209 号遺跡全景(南東から)

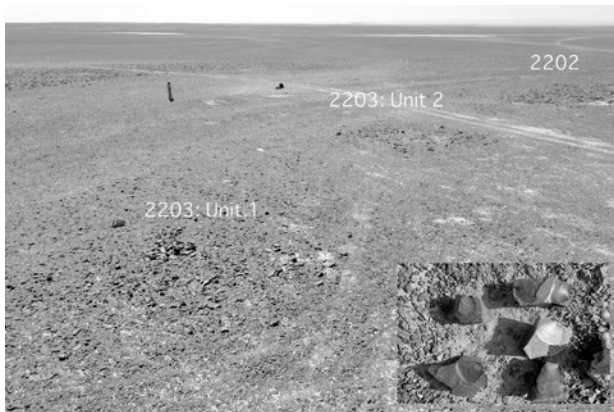


図5 タラアト・ウバイダ 2203 号遺跡全景(北東から)



図7 タラアト・ウバイダ 0214 号遺跡崖下の未登録石器散布地(北西から)

6. 2203 号遺跡(スポット採掘)

先述した 2202 号遺跡に隣接する超小型のスポット的な採掘址。直径約 5~8m の小型集石 2 件(Units 1 & 2)が、約 10m の間隔を置いて並んでいた(図 5)。集石の中には、タビュラー・スクレイパーの石核が少数含まれていた。一方、集石の端には、直径 2~3m の採掘坑らしき痕跡が認められた。先述した 2202 号遺跡の線状採掘は、この 2 件のスポット採掘の西約 10m の地点から始まっている。この位置関係は、2 件のスポット採掘が本格的な採掘ための試し堀りであったことを示唆している。類例は確認されていない。

7. 採掘以外のフリント開発

採掘型のフリント開発と並んで、単純な露頭利用例も多数確認された。それらは、採掘型と同様に、線状に延びた露頭を利用した事例(0213、2209 号遺跡)、面的に広がった露頭の利用例(0102、0209、0501 号遺跡)、スポット的な露頭の利用例(0209 南側の未登録

地点)などに細分できる(図 6)。これ以外にも、懸崖の下やワディ面など、二次的なコンテキストでのフリント採集例も認められた(図 7)。この種のフリント利用は、確認した事例以外にも無数にあるものと思われる。

8. 考察

問題は、調査で確認した様々なフリント採取法と、隣接ハラアト・ジュハイラ 2 号集落のタビュラー・スクレイパーとの関係である。この集落では、大別して 3 つのコンテキストからタビュラー・スクレイパーが出土した(図 8)。第一は住居の床面で、これらは確実に銅石器時代後半の製品と見做し得る。第二は、住居の覆土中層(つまり住居埋没過程の前半)に残されたキャッシュ群、第三は、覆土の上層に残されたキャッシュ群である。前者は仮に銅石器時代の末、後者は前期青銅器時代に、それぞれ比定することができるであろう。この過程で、小型で不規則(または横長の)タビュラー・スクレイパーから、より大型で縦長の事例

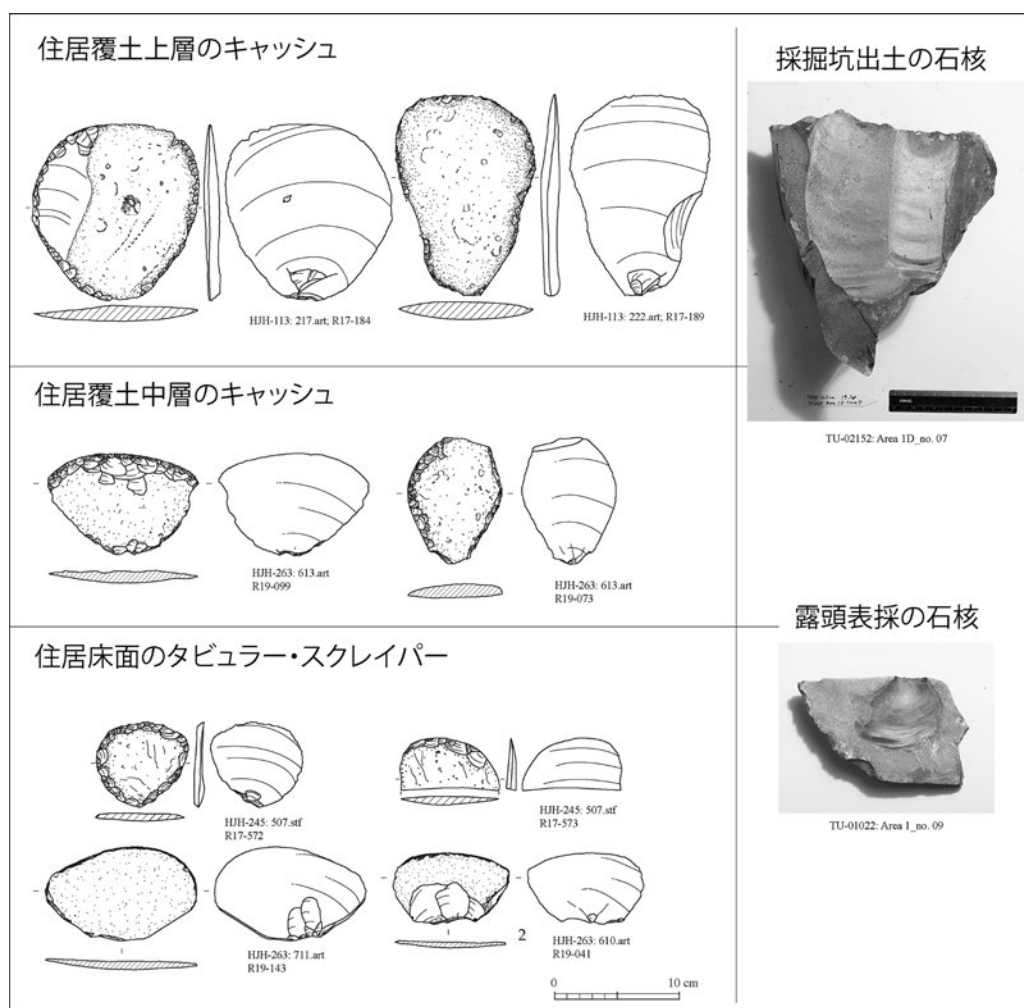


図8 ハラアト・ジュハイラ2号集落出土のタビュラー・スクレイパーと石材調達地との関係

への変遷が進んだと考えられる。この変遷自体はジャフル盆地各所の表採遺物を基にすでに予想されていたことではあるが(Abe 2008)、ハラアト・ジュハイラ2号集落の発掘調査はその層位的証拠を与えてくれた。

ただし、この集落ではフリントの原材や石核は出土していない。そこで重要になるのが、タラアト・ウバイダ台地のフリント開発遺跡群である。上記の変遷を同台地で出土した石核の剥離痕と比較すると、第一のアセンブリッジは露頭利用型遺跡の石核と、第三のアセンブリッジは採掘型遺跡の石核とそれぞれ対応し、第二のアセンブリッジはその中間形態と考えることができる。だとすれば、半農半牧民の段階では集落周辺のフリント露頭を利用した単発的な石材調達が行われ、集落放棄後の本格的遊牧民の段階になって初めて採掘による量産体制に移行したことになるであろう。だとすれば、羊毛の生産が集落内消費の段階から地域間交易のレベルにまで拡大し、それが逆に遊牧化を加速させたことになる。性格の異なる二遺跡(群)の対比は、

そのことを示唆している。

9. まとめ

30年近いジャフル盆地の総合調査によって、ヨルダン南部の遊牧化過程には、1)先土器新石器文化B後半における(ダムやシスターンを備えた)移牧拠点の派生、2)銅石器時代後半における家畜2次産品の利用拡大と遊牧化の加速、3)前期青銅器時代における大墓域の出現とこれによって示唆される部族社会の形成、の3つの画期があったことが分かってきた。今回の分布調査では、2)の問題を羊毛刈り用石器の石材調達面から追跡した。次年度の調査では今回登録した採掘坑19件のうちの数件を発掘して、採掘作業自体の詳細なデータを収集したい。

■参考文献

- ・藤井純夫・足立拓朗 2019「ヨルダン南部ジャフル盆地の遊牧化—ハラアト・ジュハイラ2号遺跡の第5次補足調査(2018年)

- 」『第26回西アジア発掘調査報告会報告集』29-32頁 日本西アジア考古学会。
- ・藤井純夫・足立拓朗・上杉彰紀 2020「ヨルダン南部ジャフル盆地の遊牧化—ハラアト・ジュハイラ2号遺跡の第6次補足調査(2019年)—」『第27回西アジア発掘調査報告会報告集』125-128頁 日本西アジア考古学会。
 - ・Abe, M. 2008 The development of urbanism and pastoral nomads in the southern Levant: chalcolithic and early bronze age stone tool production industries and flint mines in the Jafr Basin, southern Jordan. Ph. D. Thesis submitted to the University

of Liverpool.

- ・Fujii, S. 2022 Settlement and cemetery complex at Harrat Juhayra 2: An exotic Middle Chalcolithic Culture in the al-Jafr Basin, southern Jordan. *Studies in History and Archaeology of Jordan* 14, part 1: 145-160.
- ・Fujii, S., T. Adachi and K. Nagaya (in print) Harrat Juhayra 2: excavations at a chalcolithic settlement in the Jafr Basin, southern Jordan. *Annual of the Department of Antiquities of Jordan* 62.